

二〇一二年度入学試験問題（第一回）

国語（五十分）

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから13ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

早紀ちゃん^{さき}は三組女子のリーダー的存在で、唯ちゃん^{ただ}は芸能人に憧れて^{あこが}いるらしい。真美^{まみ}は自分^{おれ}をなんのとりえもない子だと思^{おも}っている。真美の弟の健介^{けんすけ}は四年生で、リトルリーグで野球^{野球}をしている。その健介が、地元発行のタウン誌の「この人に注目^{注目}」というコーナーで紹介された。

「綿貫さん^{わたぬき}、見たよ。弟さんの写真。かわいいねー」

早紀ちゃんに話しかけられて、心臓がびくんと跳ねた。

「プロ野球選手とかになるかもしれないから、タウントップクスの記事、とっておくことにしたよ」

明るい笑顔で言われて私は、ぎくしゃくとうなずいた。

「綿貫さん」

今度はうしろから唯ちゃんに話しかけられた。ハイッとまぬけな返事をしてしまう。

「私も見たよ。ねえ、タウントップクスの載^のるのって、どうしたらいいの？ 私^{わたし}も載せてもらいたいんだけど、弟に聞いてみてよ。どうやったら載れるのかをさ」

私が困っておろおろしていると、早紀ちゃんが、

「唯ちゃんも、なんか特技とか得意なこととかで目立てばいいんじゃない？ 例えばミニバスケとか絵のコンクールで入賞とか」

と助け船を出してくれた。唯ちゃんはおもしろくなさそうに、そうだね、とだけ言って行ってしまった。

唯ちゃんは確かに顔はかわいいけど、特にこれといった特技はないと思う。ミニバスケのチームには入っているけど決してうまいとは言えなくて、六年になった今も補欠だし、絵に関してもあんまりセンスはないと思う。だから早紀ちゃんが言ったことは、ちよつといやみっぱかったかもしれない。

早紀ちゃんは私を見て、にかつと笑った。ダリアみたいな笑顔。いいなあと憧れる。前に家族で行ったダリア園。色とりどりの大きな花は、幾重^{いくえ}にも花びらが重なっている、それは見事で豪華^{ごうか}だった。ゴージャスっていう言葉がぴったり。

健介もダリアみたいに笑う。大きな口でにかつと豪快^{ごうかい}に。私もそうしたいとは思^{おも}うけど、そんなふうに笑うことは到底^{とちてい}できなくて、結局ちよつとだけ口の端^はを持ち上げて、早紀ちゃんに微笑^{はなえ}み返すのが精一杯^{せいいつぱい}のだった。

弟の健介は五月一日生まれ。私は三月二十五日生まれ。四年と六年で学年は二年^{ちが}違^{ちが}うけど、月日で計算したら、一年ちよつとだけしか違^{ちが}わない。私がもう少し遅^{おそ}く生まれたら、五年生だったってこと。

^Bお母さんは予定日どおりに生まれてたらよかったのに、とたまに言う。予定日は四月十日だったそう^だ。ちなみに早紀ちゃんの誕生日も四月十日。偶然^{ぐうぜん}だけどなんだかうれしい。けど、実際に私が予定どおり四月十日に生まれてたら、早紀ちゃんより一学年下になるってこと。

私は架空^{かきう}の五年生、四月十日生まれの綿貫真美を想像する。その子はきつと早紀ちゃんみたいに明るくて、^Aダリアみたいに笑^{わら}う、クラスで人気者の女の子だ。自分の意見をききはきと言って、弱いものいじめは許さなくて、いつだって正々堂々としている。勉強ができてスポーツもできて、先生からの信頼^{しんらい}も厚い。家族からも愛されてて、いつだって笑顔の女の子。

私は架空の綿貫真美をうらやましく思う。いいなあ、そういう子になったかったなあ。なんで予定日まで、お母さんのお腹のなかにいなかったのかな。だって早生まれは損

そう言^いって、お母さんはうれしそうに笑^{わら}った。^D私も一緒に笑^{わら}う。だって本当に最近の健介の食欲はすごいから。

「今日はちよつと鼻が高かったわよ」

お母さんの機嫌^{きげん}がいい。ふふんと鼻歌まじり。健介のことをほめられて、新規のお客さんに契約^{けいやく}を約束してもらったのだそう。お母さんは生命保険の外交員だ。

「クラスの子にも健介のこと言^いわれたよ。かわいい弟だね、だ^って」

あらそう？ お母さんがまんざらでもなさそうな顔をす^る。

「四年生でピッチャーなんてすごい^って」

^E「あらまあ。すっかり有名人ね、健介は」

餃子の皮に水をつけて、くっくと閉^しじる。私も同じように水をつけて包^{つつ}むけど、お母さんみたいに、手早く上^{じやうず}手にできない。よしよし、よしよ^って感じ。

「健介がいるから鼻が高いよ」

と言^いってみる。もちろん本心で。だけど言^いったそばから、心^Fにざらつとしたものが残^{のこ}るのはなぜだろう。お母さんは「そうね」と言^いって、うれしそうな顔を^Gした。また少し心がざらつとした。

だと思^{おも}う。保育園ではいちばん身体が小さくて、やること全部がとろくて、みんなと同じことができなくて、いつもあせっていたしおもしろくなかった。そしてそれは、六年生になった今でも変わらない。

早紀ちゃんや健介みたいになりたかったな、と時々思^{おも}う。ダリアみたいに笑^{わら}える子に^B。

会社の人が見ててね、ほめられちゃった。いいお子さんでうらやましい^って。彼女のところ、中学生の男の子がいるんだけど、不登校^{ふとうこう}っていうか、引きこもり^{ひきこもり}っていうの？ なんだか大変^{たいへん}みたいなの。うちはよかったわ、ホントに。運動^{うんどう}させなきゃダメよね、男の子は。

タウントピックスの話^Cだ。みんな意外^{いがい}と見てる。意外と^C気にして^る。

私は、いつもよりも早く仕事から帰^{かえ}ってきたお母さんと一緒に、餃子^{ぎょうざ}を作^{つく}っている。

「たくさん作^{つく}って冷凍^{れいとう}しておくわ。私が遅いときは、これを焼^いいてちようだい」

「うん」

「健介は最近よく食べるから、これでも足りないかもね」

「編みもの大会優勝、綿貫真美さん最年少十一歳」

「第一回編みもの大会で、最年少十一歳の綿貫真美さんが優勝^{*}しました。今回はかぎ針編み限定。作品はあみぐるみのダリア。あみぐるみならではの温かいぬくもりを感じさせる作品。大きな口をあけて、たのしそうに笑^{わら}っているダリアが審査員^{しんさい}の心をつかみました」

タウントピックスの記事。健介の次は、私が写真入りで記事^{*}になった。

なーんちゃって。

これは四月十日生まれの架空の綿貫真美の話。現実の三月二十五日生まれの綿貫真美は、お母さんに頼^{たの}まれて、アクリル毛糸のスポンジを作^{つく}っている最中。

ふうっ、一個出来上がり。少し休憩^{きゅうけい}。健介はまだ帰^{かえ}ってきてない。お母さんは買物に出^でかけた。

出来上がったアクリル毛糸スポンジを掲^かげてみる。けっこうかわいい。近頃^{ちかごろ}では図案^{ずあん}を見ないでも新しい形^{かたち}を作^{つく}れるようになった。今作^{つく}ったのは、花のかたち^{かたち}にしてみた。

お母さんは凝^こらなくていい^って言うけど、ただの四角や丸じゃつままないし、色^{いろ}だって二色以上は使^{つか}いたい。

編みものを教えてくれたおばあちゃんは、おとし死^しん

でしまった。おばあちゃんだけは、いつでも私を「いちばん」だって言ってくれた。

真美ちゃんはほんとうにいい子だねえ。なんでもいちばん。いっとうしよう。

そう言つて、膝に抱えていつも頭をやさしくなでてくれた。おばあちゃんに会いたいな。ちよつとだけセンチな気分になつてしまふ。

最近のお母さんの機嫌が悪いのは、私のせいかもしれない。いって少し思つてゐる。五年生のときの成績も良くなかつたし、夏休み明けの家庭訪問では先生に「もっと積極的に」「もっと明るく」「もっと自信をもつて」などと、「もっと」の連発をされ、それを私に伝えるお母さんの言葉のはしりには、しょうがない子ねえ、という言葉がふくまれてるような気がした。

健介はあんなに元気なのに。健介はあんなにスポーツが得意なのに。健介は学級委員をやっているのに。健介ははきはきと明るいのに。健介は勉強ができるのに。健介は絵が上手なのに。

それなのに、姉の私ときたら。てんでだめ。勉強もスポーツも音楽も図工も、なにをとつたつてふつう以下。編

みものが得意だからって、そんなのなんの自慢にもならない。

健介は餃子を二十七個食べた。すごい食欲だ。お母さんは慌てて冷凍にしようと思つてた分から十五個ほど取り出した。餃子はいくつとおいしくて、私もはりきつて八個食べた。だつてお母さんの作る餃子って中身がぎゅうつと詰まつて、けつこう食べ度がある。それなのに健介、二十七个だなんて。来年はきつと、私の背を越すだろうな。

今日はお父さんも早めに帰つてきて、私と健介がリビングでテレビを見ている間に、夕食を食べていた。

「お母さんの作る餃子は世界一だよな」

なんて言うから、健介と顔を見合わせた。まったく調子がいいんだから、とお母さんも呆れ顔だったけど、どことなくうれしそうだった。お父さんも健介に負けじと二十個の餃子を平らげた。こうしてみんなが仲良しなのはうれしい。毎日こういうのがいい。心があつたかくなる。

私やっぱ新しい家なんていらないし、お母さんにも前みたいにパートに戻つてほしいな。それで、毎日おいしい夕飯を作つてほしい。

「これ、できたよ」

アクリル毛糸スポンジを部屋から持つてきて、お母さんに渡した。

「あらあ、かわいいわね。ありがとう」

お母さんは言つて、それを見たお父さんは手にとつて、「使うのもつたないな」と言つた。ちよつとだけ誇らしかつたし、うれしかった。

「簡単だから、もっと作つておくれ」

そう言つと、お母さんは「お願いね」と私にウインクして

みせ、お父さんは「おこづかい増やさないとなあ」と笑つた。

(椰月美智子「ダリアの笑顔」による)

【注】

*まんざらでもない——かならずしも悪くない。内心うれしい。

*あみぐるみ——毛糸で編んだぬいぐるみのこと。

*センチ——センチメンタルの略。感傷的な。涙もろい。

問一——線部A「おもしろくなさそうに」とありますが、真美はなぜ唯ちゃんが「おもしろくなさそう」だと思つたのですか。

その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 早紀ちゃんが、唯ちゃんがタウンТПピックスに載る方法を聞いた真美を押しつけて質問に答えたから。
- イ 早紀ちゃんが、唯ちゃんよりも人気者なのをわかつていて、唯ちゃんをばかにしたように思つたから。
- ウ 早紀ちゃんが、唯ちゃんにはタウンТПピックスに載れるような特技がないと指摘したように思つたから。
- エ 真美が、唯ちゃんよりも早紀ちゃんの方がタウンТПピックスに載るのにふさわしいと思つているから。
- オ 真美が、唯ちゃんにびくびくした反応をして、唯ちゃんを嫌っているような態度を示してしまつたから。

問二——線部B「お母さんは予定日どおりに生まれてたらよかったのに、とたまに言う」とありますが、このお母さんの言葉が真美に与えている影響の内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

GF1

- ア 現実の自分を否定されているような気持ちを生じさせる。
- イ 架空の自分が本当の自分になるように努力するようになる。
- ウ 無理に同級生に追いつこうとする自分を哀れむようになる。
- エ 自分がお母さんに反抗して見せたような誇らしさを持たせる。
- オ 予定日どおりに生まれなかったことに申し訳なさを感じさせる。

問三——線部「ダリアみたいな笑顔」、「ダリアみたいに笑う」、「ダリアみたいに笑える子に」と、文中には何度か「ダリアみたいな笑顔」が描かれていますが、真美が懂れる「ダリアみたいに笑える子」とは、どのような子なのか、説明しなさい。

— 6 —

問四——線部C「みんな意外と見てる。意外と気にしてる」とありますが、なぜ「意外」だと真美は思ったのですか。その理由を説明しなさい。

問五——線部D「私も一緒に笑う」とありますが、この真美の笑いにはどのような気持ちが込められていますか。このときの真美の気持ちとしてあきらかに間違いと思われるものを次の中から一つだけ選び、記号で答えなさい。

GF1

- ア 健介が有名人になっていくことを自慢したい。
- イ 健介の食欲のすごさと成長が姉としてうれしい。
- ウ 健介に対して感じている嫉妬心をなんとか隠したい。
- エ お母さんとうれしい気持ちを共有して安心したい。
- オ お母さんに共感して笑う自分にも目をむけてほしい。

問六——線部E「あらまあ。すっかり有名人ね、健介は」とありますが、ここに込められたお母さんの健介に対する気持ちを答えなさい。

— 7 —

問七——線部F「心にざらつとしたものが残るのはなぜだろう」、「——線部G「また少し心がざらつとした」とありますが、真美のこの二つの心情の違いを七十五字以内で説明しなさい。

問八——線部H「おばあちゃんに会いたいな」とありますが、ここからわかる真美の心情を説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

明治生まれの人々までは「型」というものがずいぶん重視されてきました。人間の内面がどうであるかを問うより先に、まずきつく外側から締めつけられた、「守らなければならない型」というものがある、というふうに考えられていたのです。

「武士は食わねど高楊枝」というのは、空腹という「内面」よりも、背筋を伸ばして粹^{いさ}がる「外面」を優先させるという意味です。目の前にお礼が落ちていても、人を掻き分けて拾うようなふるまいは「さもしい」と感じるからです。

それは美意識とかイデオロギー^{*}というようなズノウテキなものではなく、

1

身体的なものと言うべきでしょう。いくら「あ、お金だ。拾おう」と思っても、体がいうことをきかない。たぶんそういう「型」を昔の人たちは、身体的に刷り込まれるという育てられ方をしてきたのではないのでしょうか。

よく言われることですが、日本人にはキリスト教の神さまのような、全知全能の神という概念^{がいねん}はありません。人が見てないところでも、神さまが見ているから恥^はずかしいこと

とはできない、というのがキリスト教文化です。

『菊と刀』で、ルース・ベネディクトはこれを「罪の意識」と呼びました。それに対して、日本人は他人の目が気になるので、恥^はずかしいことができない。これは「恥の文化」である、と書きました。

でも、このとき、日本人を恥^Aじ入らせる「他人」は、別にそこに具体的にいる人間のことはないので。

「人さまには見せられないがまだ」とか「世間に顔向けできない」というような場合の「人」や「世間」は具体的な人間ではありません。それは一種の抽象概念^{ちゆうさうがいねん}です。そのような抽象概念が個人の身体の中に刷り込まれてしまうと、一人であるときも「はしたないこと」や「さもしいこと」をすることができない。しようと思っても身体がこわばって身動きできない、ということが起きます。神さまが見ているのではないのです。自分自身の中にいる「人」が見ているのです。

「恥の文化」というのは、そのようなかたちで社会規範^{しゃかいきはん}が内面化、

2

身体化したものだとはくは思います。その「身体化した社会規範」のことをばくは「型」というふう

「型に縛^しられていること」、それが日本人の倫理性^{りんりせい}の特徴^{ちゆうてく}的なあり方です。

本質的に「無信仰^{むしんとう}」である日本人には、その行動や胸中を全部見通しているような「全知全能の神」というものはうまく想像できません。日本人の倫理性^{*}を担保^{たんぽ}しているのは、神ではなく、むしろ個人のうちに内面化し、身体化した社会規範です。

《中略》

この(神ならぬ)「人」の視線を過剰^{かじよう}に意識することで、自分自身をリツ^②するという日本人の倫理性の特徴的なあり方^{*}を端的に表^ひ象^{しやう}するの「紋付き」だと思ひます。

紋付きというのは(ときどき時代劇マンガで間違^{まちが}つて描^{えが}いてあることがありますが)、家紋が五つついています。胸に二つ、袖^{そで}の後ろに二つ、大きな紋が背中一つ。

3

家紋は三対二の比率で「後ろから見られるもの」なのです。

家紋は、背中に背負う家格の象徴です。気安く触^{さわ}られたり泥^{どろ}をつけられてはいけない、非常にたいせつなものを背中の真ん中に背負っていたわけです。人間が身につけている一番たいせつなものは、「自分では見ることができず、

他人から見られるだけの部位」に貼^はり付けられていたのです。

これは昔^Bの武士の身体感覚^{*}を象徴するときの一つの手がかりになると思ひます。

武士が歩いているとき、その意識は「背中」にあったということです。

《中略》

「男が表に出ると、七人の敵がいる」ということばがありますね。最近あまり使われません(たぶん父権制^{*}である、というので自主規制されているのでしよう)。

4、このことわざは必ずしもそのような性差別的なイデオロギーの言明^{*}ではないだらうと思ひます。「七人の敵」とは、「七方向」のことだとくはカイシヤク^③しているからです。一歩表に出たら、前だけを見ているのではなく、前後左右の八方を見よ、このことばはそう教えているのではないでしようか。

ほんやりしている人間は、自分の前の一方向しか見ません。そうではなくて、残る七方向に対しても、くまなくセンサーを働かせなさいということをこのことばは教えていると思うのです。あえて「敵」という強いことばを使って、

センサーの感度を最大化することを求めているのだと思います。

自分の空間的な「位置どり」について、昔の人は今よりもずいぶん敏感だったし、それを感知するセンサーの感度を高めるために、いろいろな工夫をしていました。それというのも、身分や立場によって、服装も、ことばづかいも、身体の動かし方も、すべてが違っていたからです。立つとき、座るとき、歩くとき、お辞儀をするとき、武士と町人、男と女、大人と子どもでは「型」が違いました。化粧法一つとっても、結婚した後と前とで変えていました(最近の時代劇では既婚女性の「お歯黒」を見るキカイはもうありませんが)。そういう微細な身体性の違いが「型」として規定されていたわけです。

^c 日本の倫理は「罪の文化」ではなく、「恥の文化」であるというベネディクトの説をばくはなかなかみごとな分析だと思っています。神さまが心の中まで見ているのなら、心の中が正しければ、その行いや姿かたちが周囲からどう見えようと、それは副次的なことにすぎません。しかし、「人」は心の中までは見てくれません。心の中が正しくても、行いや姿かたちにそれが外形化していなければ、その「正し

さ」は社会的には承認されません。だから日本の「恥の文化」は同時に「型の文化」とならざるをえなかった、ばくはそういうふうに考えています。

人間の「中身」はさておき、まず、「型」が正しくできているかどうか、それをチェックするというのが「型の文化」的な発想法です。まず「型」を決める。そして、その外形的な「型」を身体に刷り込んでゆくうちに、「型」は身体の中に食い込むように内面化し、ついには誰も見えない場面さえ、その「型」のせいで、人間は心の欲望のままにふるまうことができなくなる、というのが日本的な倫理教育だったのではないかと、とばくは考えています。

キリスト教的なアプローチとは正反対のプロセスなのですが、人間を社会化する目的が、「自分の利己的な欲望を制御して、社会規範を遵守して生きる人間」つまり「市民」を創出するということであるならば、どういうコースを選ぶかと構わないと思います。^E 神奈川県から登っても、山梨県から登っても、富士山は富士山です。

^F 「型」を学ぶというのは、身体をコントロールする術を学ぶということなんです。「型」を通じて、社会的な自分のポジション、つまり「分を知る」のです。「分を知る」というのは、

「マッピングする」ということです。地図上の自分の位置を知ること、創造的に自分自身を含む風景を上空から見下ろす視点に立つということです。

子どもが、今自分は子どもだが、これから大人になるためにどうしたらいいんだろうと考えたときに、自分の行く方向を知るためには、どうしても、創造的にこの俯瞰的な視座に立たなければなりません。

「背中から見たら、自分はこういうふうに見えるだろうか」という意識の持ち方、そのための基礎的なクレンスののだと思います。

身体的センサーを活性化することによって、空間の中における自分の位置どりを常に意識するような文化、それが日本の伝統文化だろうとはくは思います。

(内田樹『疲れすぎて眠れぬ夜のために』による)

【注】

*イデオロギー——思想傾向。

*全知全能——すべてを理解し、あらゆることを実行できる能力。

*抽象概念——実際の物事からかけ離れた考えのこと。

*社会規範——社会的な基準や規則のこと。

*担保——ここでは約束すること。

*端的——てつとりばやいこと。

*表象する——あらわすこと。

*父権制的——父親が家長としての力を持っていること。

*言明——はっきり言うこと。

*お歯黒——結婚した女性が歯を黒く染めていた昔の日本の風習。

*副次的——二次的。

*アプローチ——目標への接近のしかた。

*プロセス——事を進める順序。

*遵守——法や教えを守ること。

*創出する——新しく作り出すこと。

*俯瞰的——高いところから見下ろすこと。

*視座——立場。視点。

問一

1

4

にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さて イ でも ウ つまり エ むしろ オ あるいは カ たとえば

問二 — 線部A「日本人を恥じ入らせる「他人」は、別にそこに具体的にいる人間のことでないのです」とありますが、ではどうであるというのか。次の文の空欄を埋めるのに最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

心や身体の中に があるということ。

ア 自分を見ている神
イ 自分を見ている自分
ウ 世間を見ている神
エ 他人を見ている自分
オ 他人を見ている他人

問三 — 線部B「昔の武士の身体感覚」とはどのようなものだったのか、簡単に答えなさい。

問四 — 線部C「日本の倫理は「罪の文化」ではなく、「恥の文化」である」とありますが、「罪の文化」「恥の文化」とはそれぞれどのようなことをいっているのか。文中の言葉を用いてそれぞれ説明しなさい。

問五 — 線部D「日本の「恥の文化」は同時に「型の文化」とならざるをえなかった」とありますが、なぜ中身ではなく「型」という外見の文化にならざるをえなかったのか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 「恥」を特に意識する日本人が周囲に認められるためには、外見だけでも心の欲望を抑^{おさ}えるふりをするのが早道だから。
イ 「人」は心の中までは見られないので、行いや姿かたちという外見でしか、心の中の正しさを示すことができないから。
ウ 自分の行いや姿かたちが外見としてどのように見えているかは、世間に対する「恥」の意識に大きく影^{えい}響^{きやう}を与えるから。
エ 身体に染み付いた伝統的な「型」を大切にするので、神に対する恥ずかしい外見も同時に意識されるようになるから。

問六 — 線部E「神奈川県から……富士山です」とはどのようなことをたとえているのか、わかりやすく説明しなさい。

問七 — 線部F「型」を学ぶとありますが、筆者は「型」を学ぶことでどんなことが得られると述べているか。「神」位置「視点」という三つの言葉を用いて七十五字以内で説明しなさい。

問八 — 線部①⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問

問二

7

問二

問四

問五

□

問六

--

問七

[illegible]

問八

256

問一

1
2
3
4

問二

7

問三

24

問四

罪の文化	
恥の文化	

問五

問六

問七

[illegible]

問八

④	①
⑤	②
	する
	③

評 点	
①	
②	
総 点	

二〇二二年度 国語 解答 用紙 (第一回)

受験番号